

自然と子どもの出会い方は十人十色

—自然と子どもの関係をめぐる研究活動報告 その2—

龍谷大学短期大学部・教授 里山学研究センター・研究員
中根 真

はじめに

前年度に続き、今年度の研究活動を報告する。まず、自然と子どもの関係をめぐる〈いま〉に関する文献調査の進展について(1)、次に自然と子どもの関係をめぐる〈むかし〉に関する文献調査の進展について順次述べる(2)。その上で、現時点における研究のまとめを述べている(3)。

1. 自然と子どもの関係をめぐる〈いま〉に関する調査の進展

まず、日本国内における「森の幼稚園/ようちえん」に関する先行研究を概括的にレビューし、各研究の意義や特長を確認した。CiNii検索によれば(2021年8月14日現在)、「森の幼稚園」の検索では1912年～2021年の刊行物71件が、「森のようちえん」の検索では2007年～2021年の刊行物112件がヒットする。

今村光章の整理に依拠すれば、最も古い文献は1912(明治45)年の倉橋惣三によるものであり、これが「森の幼稚園」という用語の初出とされる。これは架空の「森の幼稚園」についての6回連載であり、後に倉橋の『幼稚園雑草』に収録された。他方、研究論文は2002年の百合草論文以降とされ(今村、2011:65)、約20年間の蓄積がある。

20年間の研究蓄積の全貌紹介や学術的な評価は筆者には困難であるが、全体的な傾向を概括的に述べてみる。論文のタイトルや内容に着目して大別すると、まずは国内外の区別が可能である。鳥取や長野など国内の先進地を対象とした調査・研究がある一方、ドイツやデンマークなど海外事例を対象とする調査・研究がある。この大別の下で、それぞれの実践上の理念や意義、内容、方法、効果、参加する幼児や保育者、関与する学生への影響、実践間の比較など様々な検討が行われている。加えて、専門書も国内外の文献が多数出版されている状況である。

以上の確認をふまえ、「森の幼稚園/ようちえん」に関する研究が抱える問題あるいは限界について、社会福祉研究の立場から見きわめることを試みた。すなわち、「森の幼稚園/ようちえん」の全ての実践が保育所や幼稚園、認定こども園での実践ではないものの、各園の就園児や当該活動に参加する園児を出発点とした研究が一般的である。無論、各研究者の興味・関心、専門領域や研究アプローチの異同は尊重されるべきであり、幼児教育学や発達心理学の研究の手順や手続きとしてはオーソドックスなものであると考えられる。

しかし、社会福祉研究の立場から言えば、そもそも就園児や当該活動に参加する園児を研究の出発点にできるのかという疑問がある。なぜなら、日中に保育所・幼稚園・認定こども園に通う大多数の幼児がいる一方、諸事情による未就園児・「無園児」もいるからである。「幼児教

育の無償化」は制度的に推進されているが、依然として就学前の保育・教育は義務教育ではなく、あくまでも保護者の任意であり、養育環境の相違や「親の関わり方の格差」（山野、2016）が厳然と存在するため、近年では「保育園に通えない子どもたち」や「無園児」、「発達格差」を主題とする書籍も刊行されている（可知、2020；森口、2021）。

以上、「森の幼稚園/ようちえん」に関する先行研究が捨象している幼児の存在に目を向け、こうした問題意識にもとづき、論文「保育者養成における『子ども理解』を問いなおす」を執筆し、投稿中である（中根、近刊）。

2. 自然と子どもの関係をめぐる〈むかし〉に関する調査の進展

他方、2020年度において大正期から昭和期の大阪における郊外保育・野外保育の先駆的实践として、橋詰せみ郎の家なき幼稚園や志賀志那人の大阪市立北市民館保育協同組合・露天保育所について、以下の資料収集結果を報告していた（中根、2021：35）。

- ・橋詰せみ郎（1928）『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書株式会社。
- ・山崎千恵子編（1990）『橋詰せみ郎エッセイ集』関西児童文化史研究会。
- ・志賀志那人（1939）『社会事業随想』志賀志那人氏遺稿集刊行会。
- ・川端直正（1951）『北市民館30年のあゆみ』同市民館。

以下、それぞれに関する研究活動の具体的な内容を記しておく。

（1）橋詰せみ郎の家なき幼稚園

筆者が所属する大阪社会福祉研究会の第69回例会にオンライン参加し、和田真由美氏（姫路大学教育学部）の研究報告「『家なき幼稚園』の歴史と橋詰良一」を聴講した（2021年7月24日）。先行研究のレビューをはじめ、家なき幼稚園の設立や発展、終焉までの時系列的な整理、郊外保育の実態などスライド47枚におよぶ詳細な報告であった。

最も有益であったのは、この郊外保育への参加児童や母親が新中間層の人びとであった点であり、後述する志賀による露天保育の参加児童や母親との階層的な差異が顕著であった点である。園の方針は「幼児同士の世界」、それを構成する「熱愛をもつた母親」と「純情をもつて居る世の娘達」との協力によることが強調されている。そこには日々仕事に追われる母親の姿はなく、家事と育児に専念する専業主婦の母親が前提となっている（福元、2019：131-132）。

（2）志賀志那人の大阪市立北市民館保育協同組合・露天保育所

関連する文献収集を継続しているが、とりわけ、以下の2つの先行研究によって、志賀による露天保育所以前に、大阪市営の露天幼稚園が大都市における児童の劣悪な養育環境を一時的に改善する取り組みとして先行していたことが明らかになった。

1) 和田典子の研究

大阪の乳幼児教育に画期的な方向性と影響を与えた人物として志賀志那人の業績を詳細に検討している。なかでも注目されるのは、志賀によって開設された露天保育所や「電車幼稚園」には2つの先例—大阪市営の露天幼稚園、橋詰せみ郎（良一）の「家なき幼稚園」—が存在したことを概説している（和田、2016：176-178）。

2) 森本利夫の研究

大阪市による露天幼稚園の成立過程や保育内容、方法、当時における周囲の理解、事業終焉理由、仏教寺院との関係、仏教の自然観を検討の上、露天保育思想の意義を明らかにしている。いずれも大都市・大阪における露天保育が、児童の劣悪な養育環境を一時的に改善する取り組みとして着手された点は興味深い。例えば、八十軒長屋の狭い不衛生な長屋周辺、危険な工場周辺で子どもが遊ぶよりも、保姆の指導の下、自然豊かな広い場所で安全に遊ばせる方がよいとの判断から、1921（大正10）年11月15日から始められた（森本、2019：176）。

3. さまざまな差異のなかを生きる子どもの〈いま〉と〈むかし〉 双方を往き来しながら考える

あらためて問いたい。「子どもはみな同じ（同じだった）か？」と。いや、そんなことはない。いずれの子どもも家族や地域社会の一員として、さまざまな社会生活の現実のなかを生きている（生きていた）点は共通である。しかし、具体的には大人のさまざまな事情による差異のなかを生きている（生きていた）。例えば、世帯所得に応じた衣食住の生活、とりまく自然環境や交通利便、文教資源の多寡など多種多様な差異のなかを、である。この点は〈いま〉も〈むかし〉も不変である。2で述べたように、橋詰と志賀の郊外保育の実践が異なる階層の児童や母親に向き合っていた点はその例証の1つであろう。

したがって、里山学における子どもの参加や関与を構想する場合も、包摂と排除の両面に十分留意すべきである。つまるところ、自然体験や自然遊びの経験すら、ごく自然に包摂される子どもと排除される子どもの双方が存在している。この点について、筆者には2017年度から本学犯罪学研究センター・公募研究「保育と非行予防」ユニット研究を進めてきた経緯があるため、その知見を少し紹介したい。

非行予防の観点から非行少年の幼児期の育ちに関心を向けるなか、幼児期の育ちと思春期の問題行動との相関を説く指摘があった。例えば、家庭裁判所調査官の実務経験をもつ佐々木は児童の育ちの「土台」、源となる家庭のあり様として心地よい住環境、規律ある生活習慣、食事の風景、絵本ネグレクト、自然体験と「遊び」に言及している（佐々木、2011：2-15）。とりわけ、注目されるのは自然体験であり、自然に親しむ、具体的には五感を磨く体験、「泥んこ遊び」の力（佐々木、2011：55-63）、幼児期における遊び、自然との触れあいであり（佐々木、2011：137-138）、非行少年の多くはこれらの豊かな体験の不足、機会を剥奪されているという。即断はできないが、幼児期における豊かな自然体験の有無が思春期における問題行動と相関している可能性が示されている。

他方、非行少年や虞犯少年の矯正保護を担う教護院や児童自立支援施設の処遇実践では農業など自然環境の中での作業体験が回復プロセスにおいて重要視されてきた。歴史的には北海道家庭学校創始者の留岡幸助にまでさかのぼる。大正期に北海道家庭学校創立25周年として留岡がまとめた『自然と児童の教養』（留岡、1924）が想起される。留岡は不良少年の研究を行った結果、都会生活が主な要因であり、不健全な都会生活＝自然要素の欠如にあると考えた。そのため、北海道の原生林に学校を設け、大自然を背景に教育を施す「自分の実験」に着手し、本書はその経験を記録した1冊である。子どもの健やかな育ちと自然との関係は古くて新しい課題であることの証左である。

要するに、子どもが子どもらしく生きられない（生きられなかった）場合、子どもをめぐるさまざまな理念—子どもの権利条約や幼稚園教育要領など—の存在にかかわらず、子どもの自

然へのアクセス状況には差異が生じている。その意味で、自然と子どもとの出会い方は一律ではなく、個別的であり、まさに十人十色である。

おわりに

ひるがえって、里山学研究センターに集う研究者の幼少期における自然体験、自然との出会い方にはどのような傾向があるのかが気になりはじめている。筆者自身は滋賀県の水郷めぐりで著名な西の湖付近で育った。暇さえあれば、山や川、湖に出かけ、自然と親しく戯れて育った一人である。自記式調査を行う等、各自の幼少期の思い出を綴ってもらうことは一定の意義がある。もしかすると、ここに集う研究者の多くは幼少期から豊かな自然に親しみ、自然に対するポジティブな評価や好感を抱く人びとであるのかもしれない。

とはいえ、先述したように、幼少期における豊かな自然体験は全ての人びとに普遍化できないことも確かである。それとは真逆の状況で育った人びとも散見されるからである。例えば、被差別部落出身者や非行少年、ヤングケアラーなど、子どもが子どもらしく生きられない（生きられなかった）場合があり、保護者等の適切な関わりや促しが無かったか、不十分だったことによって、結果的に自然体験が乏しい人びとがいる。いずれにしても、自らの幼少期の体験や自然との距離感を絶対視するのではなく、相対化する視点が重要である。その意味で、自然と子どもとの出会い方は十人十色であることが基本認識となる。

文献

- 福元真由美（2019）『都市に誕生した保育の系譜』世織書房。
- 今村光章（2011）「森のようちえんとは何か」日本環境教育学会『環境教育』21（1）、59-67。
- 可知悠子（2020）『保育園に通えない子どもたち』ちくま新書。
- 森口佑介（2021）『子どもの発達格差』PHP新書。
- 森本利夫（2019）「大阪における露天保育思想の成立過程」『小田原短期大学研究紀要』第49号、211-221。
- 中根真（2021）「自然と子どもの関係をめぐる研究活動報告」『2020年度里山学研究センター年次報告書』35。
- 中根真（近刊）「保育者養成における『子ども理解』を問いなおす」龍谷大学教職センター『龍谷教職ジャーナル』第9号。
- 佐々木光郎（2011）『非行の予防学』三学出版。
- 留岡幸助（1924）『自然と児童の教養』警醒社書店。
- 和田典子（2016）「志賀志那人が大阪の幼児教育に与えた影響」『姫路大学教育学部紀要』第9号、173-180。
- 山野良一（2016）「発達格差の中の子どもたち」秋田喜代美編『岩波講座教育 変革への展望3 変容する子どもの関係』岩波書店、71-98。

謝辞

本稿は以下の研究助成による研究成果の一部です。記して御礼申し上げます。

- ① 2017～2021年度私立大学研究ブランディング事業 龍谷大学犯罪学研究センター公募研究プロジェクト「保育事業における非行予防の機能・役割に関する歴史的研究」（研究代表者）
- ② 2019～2022年度JSPS科研費JP19K13966「『幼児教育の貧困化』防止・脱却と就学前後の連続的な貧困予防に関する地域比較研究」（研究代表者）
- ③ 2021～2023年度龍谷大学重点強化型研究推進事業「創生・ポスト・コロナの犯罪学：龍谷犯罪学の新たな展開と研究ブランディング事業の定着」（分担研究者）